

三崎地区小泊校下の概要

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/23777 |

1. 三崎地区小泊校下の概要

鏡 味 治 也

1. はじめに
2. 小泊校下4集落の概要
3. おわりに

1. はじめに

金沢大学文学部文化人類学研究室では、2009年度の調査実習を珠洲市三崎地区の旧小泊小学校下にあたる雲津（もづ）、小泊、伏見、高波（こうなみ）の4集落を対象に実施した。本報告書はその調査実習に参加した学部3年生・大学院修士課程1年生および教員が、おもにその際に得た資料にもとづき、それぞれの関心を持ったテーマについて分担執筆した各章から構成されており、当研究室の調査実習報告書としては25冊目のものとなる¹。

今年度の調査対象とした4集落は、明治時代から小泊集落内に設置されていた小泊小学校の校下を構成してきた。児童数の減少によって2004年に小学校が廃校になってからも、隣接する集落として区長は密に連絡をとりあい、また後の章で見ると、神社の祭礼や七夕祭り等の行事でも一定の共通性が指摘できるなど、かつての校下としてのつながりやまとまりはいぜん一定程度維持されていると言える。しかし4集落を個別に見ていくと、瓦産業や織物工場の中心だった雲津、小さいながら漁港を有し漁業が重要な生業となっている小泊、農業が中心の伏見・高波と、その性格は多様性に富んでいる。

本実習調査はこの4集落を対象に、そこでの住民の生活の変化と現況の把握を聞き取りと観察を通じて行った。本書はその調査実習の成果報告書である。これまで同様、2009年7月末から8月初めの1週間をかけて行った本調査では、参加学生はとくに自分の調査テーマを決めず、地域の生活の総体について幅広く聞き取っていく方法を用いた。本調査の終わりの段階で各学生にそれぞれ関心をもったテーマをあげさせ、以後はそれぞれのテーマにもとづいた補充調査を学生各自が随時行った。本報告書はそうした学生各自の関心にもとづくテーマで構成されているため、全体として対象とした地区での調査内容を網羅するかたちにはなっていないことをお断りしてお

く。本章では調査対象4集落の地理的景観や歴史背景等を概観する。

2. 小泊校下4集落の概要

今回調査対象とした珠洲市三崎地区小泊校下の4集落は、能登半島の先端を占める珠洲市の中心街である飯田町から東へ8キロほど離れた、長手崎を頂点にした半島の突端部をとりまくように位置している（本書扉見返しの地図参照）。この突端部の海岸線には丘陵が迫り、海岸線に沿って小泊集落の住居が細長く連なる。そこから西へ飯田町の方に向かうと、丘陵は後退し、砂浜の海岸線から緩やかな傾斜の畑地が広がる。その海岸に近いところに雲津集落が位置する。いっぽう小泊から北へ海岸線をたどると、じきに丘陵が途切れて紀の川の河口に出る。その河口右岸の丘陵の裾に伏見集落が、また川を渡った河口左岸に高波集落が位置する。このように4集落は、長手崎に迫る丘陵の裾を取り巻くように並び、その丘陵突端部の丘の上に建てられた小泊小学校に子供が通う校下を構成していた。

この地区は、江戸時代は加賀藩領で、4集落とも稲作・畑作のほかには漁業や製塩業が行われていたことが当時の文書からうかがえる。明治維新後の1889（明治22）年から、この4集落を含む11集落が、紀の川左岸の高波集落の北にある引砂集落に役場を置いて鉢崎村を構成するようになり、さらに1908（明治41）年からはその北側の三崎村に合併された。その後1954（昭和29）年に三崎村は飯田町ほかと合併して珠洲市となり、今日に至っている。

このように小泊校下4集落は、行政上は自治体の中心からはずれた位置にあり続けてきたが、集落の規模は江戸時代のそれを今日でもほぼ維持し、雲津や小泊はかなり上回ってすらいる。表1は明治以降の4集落の世帯数と人口の推移をまとめたものである。表では1889年から1965年までの長い期間の数値が欠けていること、この間日本全体の人口も増加していることから、集落規模の維持や拡大がどこまで集落固有の事情によるものかの判断は難しいが、伏見と高波は明治以降の規模をほぼ維持するにとどまっているのに対し、雲津と小泊は明治から第二次大戦後にかけて世帯数でかなりの増加を見せている。雲津の場合は瓦産業の、小泊の場合は漁業の隆盛といった事情がそこに作用していると考えられる。

1965年以降を見ると、世帯数は4集落ともほぼ同じ規模を今日まで維持しているが、人口については1985年以降減少が目立つようになる。どの集落も1985年から2005年までに人口が3分の2に減っている。この時期はバブル経済がはじけて長い不況と低成長の時代に入った時期に重なる。雲津では瓦産業やそれに続く繊維産業が衰退し、小泊の漁業もかつてほどの収益が見込めなくなってくる時期である。仕事が少なくなって集落を離れる若い世代が増えたであろうことは想像に難くない。それでも世帯数が比較的維持されているのは、高齢者の世帯が健在であること、珠洲

市の中心街からそれほど離れておらず通勤距離にあることなど、いくつかの要因が考えられる。次章で詳しく検討するが、4集落とも人口が減り、伏見をのぞく3集落では高齢者の占める割合が高くなっているといっても、中年層や若年層の人口が極端に少なくなっているわけではない。農業などで新しい試みも見られ、それぞれ特色をもった集落が今後もしっかりと維持されていくことが見込まれる。

表1 小泊校下4集落の世帯数・人口の推移

(上段が世帯数、下段が人口を示す)

| | 1873 | 1889 | 1965 | 1970 | 1975 | 1980 | 1985 | 1990 | 1995 | 2000 | 2005 |
|----|---------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 雲津 | 55 - | 54 330 | 81 369 | 83 370 | 86 401 | 87 401 | 88 372 | 86 324 | 84 289 | 82 255 | 78 246 |
| 小泊 | 40 - | 45 243 | 74 369 | 75 361 | 75 368 | 78 366 | 81 346 | 80 312 | 82 269 | 79 245 | 76 238 |
| 伏見 | 36 - | 38 177 | 39 203 | 40 203 | 40 176 | 40 176 | 42 182 | 40 159 | 38 149 | 37 139 | 38 124 |
| 高波 | 18 - | 30 142 | 26 126 | 20 84 | 25 101 | 24 99 | 25 96 | 25 86 | 24 81 | 23 69 | 22 69 |

出所：1873～1889年の数値は『角川地名大辞典 17 石川県』（1981）より、1965-2005年の数値は国勢調査にもとづく『市町村地区別人口および世帯の概数』より

雲津集落は丘陵の開けた場所に位置し、稲作と畑作を基盤としながら、明治から第二次大戦後しばらくにかけて瓦産業が盛んになることにより、耕地面積規模に見合う以上の人口規模を支えてきたと言える。瓦産業衰退後は織物工場がいくつも建てられてその穴埋めを担ったが、それもしばらくのことだった。現在は畑作で地域の特色を生かした試みが見られるほか、隣接する鉢が崎海岸にはリゾートホテルが建てられて海水浴客でにぎわい、また運動場などのスポーツ施設も整備されており、観光産業に参画する素地もある。

長手崎の突端に位置する小泊集落は、小さいながら漁港を備え、半農半魚の集落だった。農地は丘陵の各所に飛び地として点在している。漁業では世帯ごとに所有する小型船を使った沿岸漁業や海藻採取のほか、日本海と富山湾の接点という恵まれた地先を生かした共同の定置網が安定した収益をもたらしている。

伏見集落は海岸から少し奥まったところに位置し、農業が主体の集落だった。若い世代も多く、農業の意欲的な試みが見られる。

高波集落は地理的に北の引砂集落に近いこともあり、その分村のような性格も神社祭礼や土地所有の関係では見られる。戦前は漁業で繁栄したとされるが、今では下火になっており、農業と勤めが生計の中心になっている。

3. おわりに

以上、小泊校下4集落の概観を見てきた。ここに暮らす人びとの暮らしにかかわる固有の有り様については、以下に続く各章でさらに細かく見ていくが、そのテーマは学生各自が興味を持った事柄を優先したため、この地区を語る際に重要な事柄がいくつか抜け落ちていることは述べるまでもない。

短い本調査期間とその後の散発的な補充調査で得られたデータは限られたものであり、お話をうかがう機会のなかった方も多し。なにより学生の実習ということで調べる側の未熟さも言うまでもなく、本報告書の記述にも分析にも不正確、不十分な点が多々あるものと自覚している。関係各位の忌憚のないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

注

¹ 既刊の調査実習報告書の一覧は、巻末の「参考文献・参考資料」に掲げておいた。